



# 恋だより

鯉の宮坂・宮香本舗

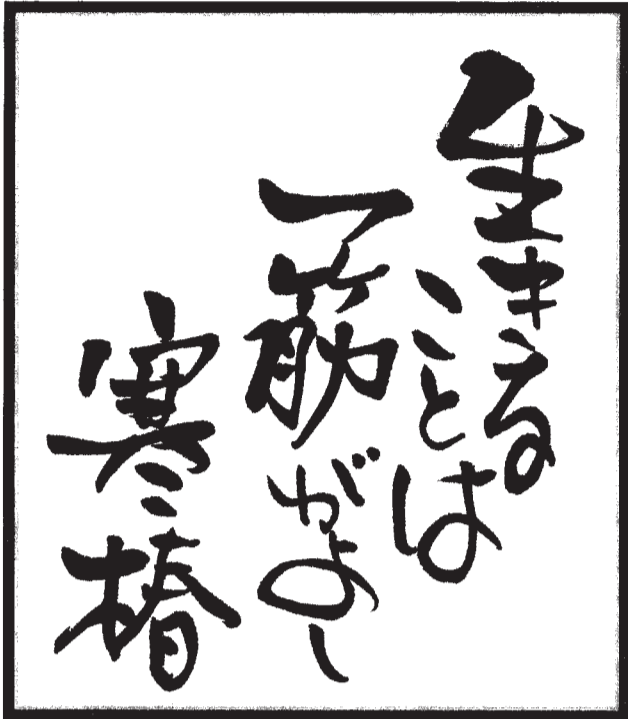
フリーダイヤル 0120-25-7188

fax 0238-21-2309

URL <http://www.koi-miyasaka.com>

■ 第29号 平成21年2月発行

■ 発行 鯉の宮坂・宮香本舗



〈季語/寒椿・季節/冬〉

五所 平之助(ごしやへいのすけ、1902年～1981年)は、日本最初の国産トーキー映画「マダムと女房」や、最初の「伊豆の踊り子」の監督として有名である。俳人としても知られており、「春燈」同人として「五所亭」という俳号で活躍した。

現在のNHK大河ドラマの主人公、直江兼続公は、主君や家臣、民を愛し、師と仰ぐ謙信公から受け継いだ「義」を一筋に貫き通した先人です。この句もどんな職業であれ、どんな人生であれ、一旦自分が決意したら、その道が無二無三に突き進む尊さを詠っています。何事も続けることで未来は拓けるのだ。迷ってはいけない。何事も途中で投げ出しはいけない。寒中に咲く椿が語りかけてくるようです。

## ごあいさつ

皆様少し遅いご挨拶になりましたが、明けましておめでとうございます。また、旧年中は格別のお引き立てを賜りまして、誠に厚く御礼申し上げます。確か昨年も同様の話を致しましたが、ここ数日も米沢の冬とは思えない暖かな日が続く。地球の温暖化というものがひたひたと確実に押し寄せてくるということが実感できる今日この頃です。私が今更申し上げるまでもなく、地球温暖化によって起こる様々な弊害は、これから未来を生きる世代にとっては死活にかかわる重要な問題でしょう。どこかの国の政治家みたいに、現在抱えている重大な問題を解決出来ず先送りし、次世代にツケを回すのは避けなければならないと思います。これはこと環境問題に限らず、年金や医療や介護などの社会保障、消費税などいろんな分野に関わることで、すぐに手を打たなければならぬこと。少なくとも2～3年を要する中期的なこと。さらに長期的な展望が必要なことなど、時系列に分けて問題解決を探らなければいけないのではないのでしょうか。

さて、若輩者が大言壮語を吐きましたが、実は同じ事が我々の会社でも起っているからです。お客様へのサービス、商品の品質、生産性、人間関係を含めた働く現場の環境、これからの市場のことなど、我々の会社には様々な問題が溢れております。ここで大事なものは何が問題なのか、その問題の本質は何なのかを明確に把握することでしょう。私自

身問題とは、「あるべき姿・理想」から「現状・現況」を引いた時に浮かび上がるものだと考えています。そしてその問題を解決するのが「仕事」であり、人生ではないかと思っています。私どもの会社は、吹けば飛ぶような超零細企業ですが、経営理念やビジョンや夢は、大企業にも負けないものがあります。とはいうものの年末のセールにおいてもお客様からお叱りやご指導をいただくなど、現状・現況は大変お粗末なものですから、取り組むべき問題が山積みになっている会社であるということです。しかし前向きに肯定的に物事を考えると、その問題を一つ一つ解決して行く、つまり着実に丁寧な「仕事」を続ければ、会社の規模は別にしても、お客様から愛され信頼され、そこに働くものがやり甲斐を感じ、働く喜びを得て、家族にも友人にも胸を張れる企業になれるのではないかと思います。今後ご指導賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶というよりもこれまでの反省と、新しい年を迎えての所信の表明みたいになってしまいましたこと、お許しいただきたく存じます。

末尾になりましたが、暦の上では立春を過ぎたとはいえ、寒さはこれからが本番です。また空気も乾燥する時期で、インフルエンザやお風邪など召さないよう、健康なお体でこの冬を乗り切って戴きますよう、米沢の地からお祈り申し上げます。

代表取締役 宮坂 亮 拜

～新酒～  
 1800ml 2650円  
 はつぶね 720ml 1350円  
 〈福牡丹酒造〉

毎年ご馳走になっていますが、飲み口はもろろんのこと、後味が大変素晴らしいお酒です。後味がいい酒ってあんまりないと思います。そして特に今年の出来は良かったそうだから期待できますよ!

雪菜 160g 525円  
 ふすべ漬 160g 525円  
 〈やまいち漬物店〉

雪の中で育つ野菜の芸術品と言われてます。そのルーツをたどれば、雪国での生鮮野菜の確保のために奨励したといわれる、上杉鷹山公の時代までさかのぼります。米沢地方の方言で湯通しすることを「ふすべる」と言います。雪菜は「ふすべる」と葉わさびや辛子とは違った独特の辛味があり、歯触りもシャキシャキした感じになります。お酒の肴にご飯のお供にぴったりの逸品です。

## 山形ならではの冬の風物詩食

ゆきわりなっとう  
 雪割納豆 300g 525円  
 〈まるお食品〉

赤穂の天塩とこうじを混ぜた発酵食品。以前も紹介したように、鯉節と七味を混ぜたものが肴に最高です。これをご飯の上に乗けて、番茶をかけた納豆茶漬けもシビシる美味しさです。

マルマゴ 220g 525円  
 赤かぶ漬 220g 525円  
 〈内藤醸造〉

山の斜面の赤い宝石といわれる山形庄内地方の温海特産の赤かぶを、すきと甘酢に漬けたものです。鮮やかな紅色、香り、パリパリとした歯ざわりが格別です。

米沢牛 山形県産黒毛和牛 100g  
 〈黄木〉切り落とし 480円

我々地元市民の御用達の品です。肉屋のレベルはこの切り落としを見れば分かるのです。部位は指定出来ませんが、ロースの切れ端も入っていることがあり、美味しくて安くとてもお徳です。リピーターの方が多いのもうなずけます。

おみ漬 マルマゴ 200g 525円  
 〈内藤醸造〉

おみ漬は、山形を代表する青菜漬けに、大根、人参、菊等と一緒に細かく切り刻み丹念に揉み、漬込みます。おみ漬は一生懸命揉んで漬込むことから揉み漬けともいわれていたようです。また最上川の水運を利用した物流の盛んだった頃、近江商人がこの地に伝えたので近江漬け＝おみ漬けとなったという説もあるようです。

その他にもお召し上がりになりたい商品がございましたら、どうぞなんなりとお申し付けください!



# 天地人

## ～直江兼統～

サキヨミ  
徹底ガイド  
シリーズIV



いよいよ「天地人」がスタートしましたが、兼統の幼少時と六役の子役、加藤清史郎くんの好演もあって、昨年の「篤姫」を上回る高視聴率をマークしたようです。清史郎くんの演技に思わずホロッとこられた方も多かったのではないのでしょうか？「わしはこんなところ来とうはなかった」というセリフは、ひそかな流行語になるかもしれませんね！

さてこの「天地人」ですが、原作を読むと「愛」が兼統公の青年期まで舞台も新潟上越が中心となっています。彼が米沢に移封されたのが38歳の時ですから、当然米沢が舞台になるのは、今秋頃からになりそうです。でも本当にドラマとして面白くなるのは、本能寺の変前後からです。権謀渦巻く戦国時代において信長、秀吉、家康という有史でも稀に見るそうそうたる大立者を向こうに回し「義」を貫き「愛」を掲げて領民や主君や家臣を愛し、上杉家を守りてゆく生き様には今から心躍るものがあります。このコーナーでは、一足先に兼統公にまつわるエピソードをちょっとだけ掘り下げて紹介致します。

## ファンとピンチは表裏一体であること

上杉謙信は、松倉城の支城として室町時代に築かれた魚津城(富山県魚津市)に、信頼を寄せていた河田長親を城主に配っていた。謙信の死後長親は、信長から家臣になれとスカウトされたが、二代目の景勝に変わらぬ忠節を尽くした。天正9年(1581)、信長は京で「馬ぞろえ」という、いわば織田軍の関兵式ともいうパレードを企画し、その時に彼の支配下にあった全大名が参加することになり、北陸方面の守備がからがらになった。この機を見逃さずに越中の諸城を攻めようと言う長親の提案に、景勝兼統のまだ若いコンビが乗ったのだ。当初は勝利を重ねたが、この時3つの不運が彼らを襲った。1つは頼りにしていた長親の突然の病死、2つ目は景勝の留守を狙って新発田家重が反乱を起こし、内戦が野火のように広がったこと、3つ目は、約定を結んでいた武田信玄が子、勝頼が信長・家康連合に簡単に滅ぼされてしまったことである。

## 思い込みはリスクを拡大せるといふこと

この頃は連戦連勝を重ねていた信長だったが、5年前に北陸侵攻を行った時には、謙信の猛烈な迎撃に遭い命からがら敗走していた。この屈辱的な敗北もあったため、景勝、兼統は復讐に燃えた。信長が直々に攻めてくると予想し、迎撃の準備も進めていた。しかし信長は、直接反撃することなく、先に信州から甲州に向かって武田勝頼を攻め滅ぼす戦略を取ったのだ。加えて新発田軍や景勝と兼統に不満を持つ豪族に通じ、上杉家の領内から混乱させる戦術も同時に行った。これによって上杉家は背を日本海にした陸の孤島になってしまったのだ。新発田家重の反乱が拡大していった天正10年(1582)、魚津城から城を守る将12名の連署で援軍を求め手紙が届いた。中条景泰、竹俣慶綱、寺島長資らの将の元、城兵はわずか100余名で40日間持ち堪えたが食糧も武器もすでに尽き、ここに1万5千の織田軍の大將、柴田勝家らに攻められ進退ここにきわまった。

## 不可避な撤退には大きな犠牲を伴うということ

しかしながら景勝は天神山城まで出陣したものの、領内からは新発田軍、信州川中島の海津城には織田軍の森長可に占領されて、さらに上野国(現在の群馬県)に駐屯している織田軍など3方からけん制を受けて、すぐにも春日城に戻らなければならないという窮地の状況下にあったのだ。景勝は一人一人の将に呼びかけるような文章で援軍の出せないことを詫言、勝家軍との和睦を行い、命を捨てることなく勝家の軍門に下るよう指示した手紙を送ったが、籠城する将兵からは拒絶された。彼らは数十日間の籠城で身も心もずたずたになり、戦う気力はあっても体がいうことを利かない状態にあったのだ。例え死すとも敵の軍門に下ることを良しとせず、惨めな闘いをするなら潔く腹を切るのが上杉魂という結論で、結果全員が戦わずして自決したのであった。

## 生かされるということとは天命であるということ

この集団自決を知らずに魚津城に総攻撃をかけた敵将勝家は、百数十体も並ぶ遺体に感動し、本来なら当たり前前の戦勝地での略奪も、さらし首も行わず、手厚く葬り「上杉魂の墓」という墓標も建てて冥福を祈ったという。ここに魚津城が落ち、そして勢いついた敵軍の刃が三方から上杉軍を囲み侵攻を開始せんとした時、景勝、兼統コンビが人生最大のピンチ、上杉家滅亡という危機にさらされた瞬間でもあった。

この魚津城での上杉軍の集団自決が行われたのは、天正10年6月3日のことである。この日は「運命の日」でもあった。前日京都において、その後の日本の歴史を大きく変える大事件が起こっていた。この事件が発生していなかったら、おそらく上杉家は滅ぼされていたであろうというのが、現在の史家の意見の一致するところである。言わずと知れた「本能寺の変」。この事件は景勝、兼統の2人を救った天の采配かもしれない。この知らせを受けた織田軍は京に向けて退いた。明智光秀の謀反により、上杉家は滅亡の危機から救われたのである。

## 決断を迫られるその苦悩が人を成長させるということ

援軍を出すという景勝の命に背き、見殺しを決め強引に景勝に手紙を書かせたのは兼統であった。この時兼統は、樋口から直江家に養子に入ったばかりの若年23歳の執政だった。今でいえば、総理大臣の下で、防衛、財務、農水、厚生、国交など主要なポストをすべて兼務し、上杉家の全権を掌握するスーパー大臣であったといえる。当然内部からも妬みそねまれ、苦しい立場に置かれていたが、この魚津城での出来事もさらに彼を窮境に追い込む大事件だった。組織全体を守るか危地にある前線の部隊を救うか、究極の決断を迫られた苦悩が、兼統をより大きな人物に育て上げたといえよう。組織のトップというのは、例えどん底に突き落とされても孤独の中から立ち上がり、決断をしなければ務まらないのだろう。諸説は色々あるが、この出来事が彼の掲げた「愛」、即ち仁愛、慈愛の心が芽生えた瞬間ではなかったろうか。この事件より兼統は、軍規に背いた者を除き、戦において一兵も見捨てることなく、米沢に移封され領地を4分の1にされた時でも将兵を一人も解雇することがなかった。

## 鯉太郎の独り言...

私も経営者の端くれなので、たまには経営の勉強でビジネス書を読み、いろんな成功モデルを学ぶこともあります。しかし他人の成功例を勉強するより、歴史に学ぶ面白さの方が断然上です。先人たちがその時代背景を理解し、どのように決断して時代を切り抜けてきたのか、面白さは善悪の判断のみの歴史ではなく、そうした行動をとらざるを得なかった時代背景を正しく捉え、真実を学ぶことの中にあります。そしてその決断には日本人としての生き方が反映され、我々日本人のアイデンティティ(不変性や主体性)を具体的に提示してくれるものだと思います。

過去に学ぶこと、つまり歴史を学ぶ意味とは、要するにケーススタディ(事例研究法)やベストプラクティス(最も効果的な実践の方法)なのだと思います。歴史を学ぶ意味とは、歴史上の状況を踏まえて未来での物事がどう変わっていくかを詳細に調査・推論する学問分野、つまり未来学なのではないでしょうか...



おいたま地方を「東洋のアルカディア」と賞賛した

## 青い目の芭蕉 Part III

～越後街道編～

イザベラ・バード Isabella Lucy Bird

1831年10月31日～1904年10月7日  
英国生まれ。旅行家・作家。



明治維新からまだ10年ほどしかたっていない日本。この国を東京から北海道まで放し、美しい自然のなかの貧しい農村、アイヌの生活など、明治初期の日本を浮き彫りにした旅の記録が残されている。執筆者はイギリスから単身やってきた46歳の女性だった。この紀行はハーバート・C・ポンティン「英国人写真家の見た明治日本」やシュリマンの「シュリマン旅行記清国・日本」と比べると、「日本好き」というフィルターが薄い分、当時の日本の一般民衆の姿が生々しく浮かび上がってくるような描写が多い貴重な資料となっている。彼女が東北の旅を始めたのは46才。奇しくも芭蕉が奥の細道紀行に旅立った年齢と同じであった……

## 野次馬を引き連れた、魔法使い。

イザベラ(以下ベラ)は、現在も江戸時代の宿場の面影を今もそのままに残し、人気の観光スポットになっている大内宿を、村人総出の見送りで見送った。明治11年(1878)6月30日、彼女は市野から高田、新鶴村を進み、越後街道(現国道49号線)へと入り宿場町、会津坂下(ばんげ)にて泊る。翌朝大事件が起こった。旅中、常に好奇の目にさらされ続けたベラだったが、ここでも出発時に宿屋前に2000人以上が、未だ見ぬ外人女性を一目見ようと集まっていた。馬上のベラが鞍の箱から望遠鏡を取り出そうとした時、突然遠巻きにしていた群衆が、何かに怯えたように、喚きながら一斉に逃げ出し始めたのだ。子供は押し倒され、老人は腰を抜かし、上を下への大パニックになってしまった。この有様に逆に驚いたベラが、何事かと思ひ、通訳、秘書兼執事の役、そしてベラにとっては曾良ともいべき伊藤鶴吉に尋ねた。すると人々は彼女がピストルを出して、自分たちを脅かそうとしたと思ひ込んで出来事だと分かった。そこで彼女は、これは実際には望遠鏡であって物騒なものではない事を使い方も含めて伊藤に説明させた。そして集まった人々の何人かに望遠鏡を実際に覗かせた。彼らの驚きは尋常なものではなかった。ベラのコトは、きっと魔法使いに見えたに違いない。

## 驚愕の可動式橋梁。

一騒動の後、宿屋を出てまもなく気多宮(けたまや)というところで、直進する沼田街道と、右折する越後街道へと分れる。

ベラは右へ折れ、越後街道を鐘撞堂峠(かねつきどう)へと上って行く。峠を越えると眼前に大きな川が現れたが、ベラはこの川に架けられた橋に驚く。「私たちは阿賀野川という大きな川にかけてある橋を渡ったが、こんなひどい道路にこんな立派な橋があるとは驚くべきことである」その橋とは十二艘の舟を連結したもので、それぞれ平底舟の先を川上に向けて平行に並び、その上に板を渡して橋としたものだった。これなら川の水位が上がった時には舟を岸に上げるなりして舟り、水位が平常に戻ったらまた架け直せば良いのだから、洪水の多い川では極めて合理的な橋である。ベラはこの舟橋を渡り、対岸の片門部落に通り山岳地帯へと向かい、越後山脈の山越えに入る。

## 旅のイッセンと、小さな魔法。

彼女は東松峠(たばねまつ)を越えてから野沢を過ぎ、阿賀野川の発達した河岸段丘を右手に見ながら越後街道を進んだ。河岸段丘の向こうは雪を冠った会津山系の山々が青空にそびえていた。下野尻に到着した時は夕方になっていた。ベラは、この下野尻という村で泊まる予定であったが、ふと前方の峠を見上げると「車峠の刃のように鋭い山の端に、ほとんど突き出るばかりという、すばらしい場所立っている」一軒の家が目止まった。彼女はその家が余程気になったのか、早速伊藤を呼んで村人に尋ねさせると、茶屋であるという答えに、さっそく予定を変更し宿泊先を変えてしまった。思いついたらすぐ行動に移すのが、ベラの旅の流儀かもしれない。

ここでベラは2日間宿泊するが、その間こんな事件もあった。隣家の子供が魚の骨を喉に引っ掛けてしまい一日中泣き続けた。母親は何もできずおろおろするばかりだったので、それを見兼ねた伊藤が気の毒に思い、子供をバードのところまで連れて来た。彼女はすぐさま、骨を見つける事ができたので、持っていたピンセットで取り除いてやった。ここでもまるで魔法使いのような技を披露する。母親は喜んで、お礼にたくさんの餅とお菓子を盆にのせて寄越した。

## 悠々陶然の川下り。

7月2日、車峠から室沢、梁山を抜けて津川へと出る。ベラによれば、この辺りの生活は最低で、大人は虫刺されによる炎症を起こし、子供は皮膚病で体中がただれていて、家屋は汚く野蠻人と少しも変わらなかったという。日光を出て以来、日本人の住居環境は北に上るにしたがって悪くなること述べている。津川で一泊し、翌朝伊藤にせかされ、早朝の船で阿賀野川を下り新潟へと向かう。泥沼を這い雨に打たれながらの馬での陸地移動と比べると、新潟までの舟旅は、快適で楽しい旅だった。残雪の山々、両岸は奇岩といわれる尖った岩肌が続いている。「津川の急流下り」と呼ばれる川下りは、ベラを飽きさせず、うっとりとするような景色を眺めながらの約20キロは、実に満足の行く旅であったという。ここを過ぎると流れ

はゆっくりとして阿賀野川の川下りを、「廃虚のない」ライン川下りとまで形容させている。ベラはいくつかの運河を進み、ようやく新潟に辿り着いた。この新潟は、当時横浜と同様な開港場であったためベラは横浜と同じようなイメージで新潟を考えていたようである。

## 旅程の変更と、新たな旅立ち。

しかし実際の新潟は、ベラのイメージをその見事に破くには十分だったようだ。ベラは新潟の町について、次のように述べている。「美しい繁華な町である。人口は五万で、富裕な越後地方の首都である。(中略)病院と県庁、裁判所、諸学校、兵舎、そしてそれらすべてに劣らず大きな銀行などがあり、みなヨーロッパ風の建物で、進取的で、ひととき目立つが、ぐちゃぐちゃ品もなければ味気もない」とぼつりと切り捨てている。良い印象を得られなかった新潟であったが、イギリス聖公会宣教師協会派遣の宣教師として新潟で布教をおこなっていたフィン夫妻の歓迎を受ける。ベラは教会という西洋館で、久しぶりにミとシラミから開放された文化的で快適な数日間を送る事になる。その間故郷からの手紙を読んだり、町の見物、これからの旅程などの検討をした。

一週間ゆっくりと英気を養ったベラに旅立ちの時が来た。実は新潟を訪れたのは汽船で蝦夷へ行く予定だったのだ。しかしながら北海道へ出航する船が1ヶ月近く出ないと分かり、急遽陸路へと変更したのであった。明治11年7月10日、フィン夫妻と娘のルス、そして多くの群衆が彼女の見送りに運河の端までやって来た。平底船で広い信濃川に出た時、急に寂しさが込み上げて来たという。しかし決意を新たに、ベラは自らを奮起させて、途中から陸路に変え奥地へと向かって行った。この先には彼女が「描いたような美しい大地」「東洋のアルカディア」と称したおいたま盆地が待っている……

最終章 Part IVへ続く

\*参考文献等は恋だより第28号を参照ください。

## 鯉太郎の独り言

私の旅においても、到着した飛行機から自分の荷物が出て来なかったり、飛ぶ筈の飛行機が飛ばなかったり、ツアーで一人が置いてけぼりをくらったりするのは可愛い方で、財布を盗まれたり、身ぐるみを剥がされ転がされたり、十日間もポン引きに付きまといわれたり、食中毒に罹って七転八倒するなど、数え切れないほどのハタラギに彩られている。でも予期せぬ出来事が予期せぬタイミングで起こり、右往左往してしまうような旅の方がいつまでも記憶に残るものだ。旅の醍醐味とは、未知のもの、未知の人々との出会いではないだろうか？旅を楽しくするエッセンスの一つは、最初の旅程など糞くらえ、とにかく「これだ!」と思った自分のインスピレーションを大事にし、即実行することかもしれない。旅とは非日常を味わうことではないかと思っている。

